
インタフェースはそこで螺子捲く

沙堂 瑠々亜

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

インタフェイスはそこで螺子捲く

【Nコード】

N0127C

【作者名】

沙堂 瑠々亞

【あらすじ】

混沌の中に在るもの。混沌から派生するもの。真相然り、可能性然り。ノ微笑むのは螺子捲き人形、朽ちるのは自分、傍らに居るのは、螺子を捲くのは誰か。

インタフェイスはそこで螺子捲く

〈事前〉（前書き）

インタフェイス【interface】：コンピューター本体と各種周辺装置やコンピューター同士を接続し、電気信号の大きさを調整したり、データの形式を変換したりして、両者間のデータのやりとりを仲介する回路や装置。また、人間がコンピューターなどの装置を円滑に使用できるようにするための操作手順。インターフェイス。／／大辞林より抜粋

インタフェイスはそこで螺子巻く

〈事前〉

親友と、その妻が帰らぬ身となったのは、葉桜になりだした春のことだった。

それはまったく寝耳に水の話だった。電話が掛かってきたとき、莫迦を云うなとその場で親族に怒鳴った程だ。

駆け落ち同然で結婚した二人は、親族にとって家に泥を塗った者でしかなかったらしい。

物言わずに帰ってきた二人に、各々の実家は形ばかりのとむらいを済ませた。

損傷が激しいという理由で、彼らのなきがらは無く、献花するだけの式だった。

後に残ったのは、彼らの十歳になったばかりの一人娘だ。

親二人を一度に喪った彼女は、お情けでどちらかの家に引き取られる運命にあった。

「俺の家に来る気があるか」、厄介者を引き取る義務があるのは向こうだのなんだのと、押し付けあう親族の姿を見せたくなかったのかもしれない。既にそんな醜い擦り合いの話の小耳に挟んでいた俺は、親友とその妻の忘れ形見に、訊いてみた。

彼女は押し黙った。長い長い沈黙の後で、こう答えた。

「あなたの素性を知った上で、問題がなければ引き取ってもらいたいわ。」

インタフェイスはそこで螺子捲く

「琉平さん。お早う」

寝惚けた頭で居間に行くと、彼女はダイニングテーブルで本を読んでいた。

お堅い装丁の辞書やら分厚い洋書やらスコアやら和書やらが、尖塔のように積まれている。

白いスチールのテーブルには、あまり似つかわしくない光景だ。

「なんだこれは」

「図書館で借りてきたの。規定の十冊、二往復して家に持ち込んだわ」

二日酔いでもないのに頭がズキズキと痛んできた。

リビングの時計は無機質に1・1・4・5とデジタル数字を並んで表示している。

お早うと彼女は云ったが、どう見ても昼前の時間帯だ。

つまり、明け方に帰ってきて昼前まで爆睡していた俺に合わせて挨拶したのだった。

テーブルの上に広がった本一式に俺がとやかく言うより早く、彼女は声を掛ける。

「今ご飯よめるから、座って待ってて」

読んでいた本をぱたんと閉じて、席を立った。昼前に家事をこなして、自身の趣味の探求に取り掛かるのが彼女の日常だった。

台所でカチャカチャと皿を取り出す音が聞こえる。飯を待ちながら、真正面で堆く積まれた塔を睨む。小難しい題名の本が数多くあった。物理学だか哲学だか自然科学だか、素人から見れば区別がつかさうにないボーダーラインの本だ。彼女の雑多読みは半端がなく、英語の題名の楽譜なんぞもどう使うのかさっぱり解らなかった。

この生活を奇妙な同居と言わずして、なんと呼ぶか。

あの日から一年、彼女は、新しい生活に順応しこのマンションで日々を送っていた。

俺と彼女は赤の他人だ。引き取る行為は、世間一般から見れば特異な行動だろう。

だが 俺が彼女を引き取るにあたって、親友とその妻の実家からなんのお咎めもなかった。

余計なお荷物が減って、財産配分も減って、願ったり叶ったりだったらしい。行政の審議なんて後回しで、表向きにどう改竄したかは知らないが、俺に当面の金を渡してさっさと消えた。

居候が居ても、俺に支障はない。彼女の個人教師が来ようが、ピアノ教師が来ようが、自宅往診が来ようが、俺は日中家に居ないからだ。専属無しのジャーナリストという不規則極まりない仕事の時もある、遊びで帰らないこともある。費用は彼女の親族から上乗せ捻出、口止め料込み、詰まる所俺は彼女に養われていた。

そんな事情を知ってか知らずか、彼女は不平不満も云わず俺と同居している。厄介者と云われて親戚に妬まれるよりかは、保険金やら遺産やらを投げ渡してでも気儘に生きたいということなのか PTSD（心的外傷ストレス障害）で、心細くなって藁をも縋りたいのかも知れない。

「そつだ、今日は午後から往診の日だから。終わったら書類のサインよろしくね」

トマトカルボナーラがスープ付きでやって来た。バジルの葉も添えてあるのが彼女らしい。

「……………げ、あのハカセ野郎また来んのか」

フォークでパスタを巻き取ろうとして、落としてしまう。

「砥部倉先生トクベクラって呼ばないと、琉平さん」

彼女の PTSD の状態を見極めるために、このマンションの一室には、自宅往診の医師が来る。

奴については、嫌味で奇特な人間だという感想しか湧かない。上から物を見る態度が気に食わない中年だ。

「先生は色んなことに詳しいから。今日も教えてもらおうと思って、本を借りたの」

そう云って、彼女は再び本を開く。目を凝らすと、向かいがわのずらずらと書かれた本の文字が読み取れた。「不可侵の法則から

なるシステムが作り出す、不規則かつ複雑な軌道の非周期振動」：
… 医師と患者がこんな話題で盛り上がるというのも、ある意味 健全ではない気がするが。

「……なあ。今更だが、何でお前ノコノコ付いて来た？」
気を取り直して出されたスープを飲んだ。ふと頭に浮かんだ疑問をぶつけてみる。

あの時、俺の素性を知った上で問題がなければ引き取ってもらいたいと彼女は云ったが どう考えても、俺は保護者協会からPG - 20を付けられる人間だ。酒と煙草を常用し、仕事柄 不規則に行動、朝に寝て夜起きる事も多々あるし、女が恋しければ外で寝る。その生活リズムは同居人が来ても変わらなかった。告げ口されたら児童福祉法違反か未成年略取で訴えられてもおかしくない。

ずつと不思議に思っていた。 『彼女は、何故自分に付いて来たのか？』

「じゃあ琉平さんは、わたしを気まぐれでここに呼んだの？」
動じずに彼女は微笑み、こう切り返した。

彼女の長い黒髪がさらりとなびく。決して強い口調でなかったのに、意志の籠った力強い目を見せ付けられて、答えに窮した。

この俺が子供相手に無言になった、ということになる。
「真相なんて解らないほうが、結果的に善いこともあるわ」

黙っていると、若干十一歳の少女は、自らの経験のように俺に話した。

「どれだけ情報を仕入れても、ううん、仕入れれば仕入れただけ未来は予測不可能になるものよ。真相を明かすはずの材料が、却って事態を混乱させているなんて、皮肉だと思わない？」

数多の本から吸収した知識か。あるいは、それから悟った自答か。それは、学生時代に習ってから久しい統計学理論だった。厭になるほど叩き込まれたせいで、普段は奥底に封印してあったものが、ぴんと来てしまったのだ。

「くだらねえ」

一回りも生きていない小娘が、小説の感想の如く同意を求める。一瞬、学生時代のように持論を展開させようとして 相手が十一ということを出し、そんな言葉を吐いた。いい年をした男が、小娘と対等にカオス理論を話す姿は、滑稽以外の何物でもない。付き合う義理はないと云わんばかりに、俺は最初から会話を終わらせたのだ。

「サンプルに考えりゃいいんだよ。物事なんて勘で行えば充分だ」
「インスピレーション勘も自身の経験と理論と推測を重ねた結果だわ。琉平さん、わたしはただ、カオスにしたかっただけ」

「……………」
「答えを混沌わかたずさせたかったから、わたしは琉平さんの家に転がり込んだの。」

〈事態〉

「……混沌、ね」
カオス

天井に向かつて煙を吐いた。深く呼吸をするたびに、煙草の煙が体中を満たしていく。

外に出てくのも億劫だった。幸いにして、何処で吸おうが同居人は文句を言わない。換気扇と窓を開けたのは俺なりの譲歩だ。

時々思うのだが、あいつとの会話は、三十代の女と話している気分になる。

世間を斜めに見ているというよりかは、諭されている気分になるのが正しい。

瓦解するような気がしてならなかった。自信の喪失と云えばいいか。あの頭の回転の速さ、手際の良さ、知識の吸収率の高さ。彼女と話すと、俺の生きてきた年月が無駄だったと、知らしめられているようだ。

「なあ、ハカセ」

彼女の検診が終わり、例の医者が部屋から出てきた。椅子にふんぞり返って煙草を吸っていた俺は、奴を呼び寄せる。

リビングが煙たかったのか、偏屈医者は顔を顰めた。これ見よがしな咳をけほりへ行くと、書類一式をテーブルに広げる。呼んでいるのに返答が無い。

「無視すんなよ、偏屈」

「確かに私は博士号を取っていますが、現在の職業から正確な呼称は『医師』が正しい。貴方に『ハカセ』『偏屈』と蔑称される謂れはないわけです」

皮肉の意味で眼鏡が似合いそうな奴だったが、奴は目が悪いわけではなかった。年の頃は四十過ぎ位、ワマツラ面長、無精髭はかろうじて無し、医者をやっていないければ、学生に嫌われそうな神経質大学教授といったところか。

診断書だか領収書だかを目の前に置かれる。持参の朱印ケースを取り出すと、蓋を開いた。いつもと同じく、必要書類にサインをして、印鑑を押せということらしい。

「解った、言い直す。ヤブ風偏屈医者」

ちなみにヤブ風というところがミソだ。

「あなたの一挙一動を、是非とも報告書にまとめて本家に送りたいですね」

「賭けてもいいな」煙草の先を揺らして、灰を落とす。「報告しても俺に咎めは来ない」

灰皿は既に三本の吸殻が乗っていた。俺がこの医者を待っている間に吸っていた数だ。

「でなきゃ、最初から赤の他人の俺と住まわせるはず、ないだろう」テーブルの上の必要書類にサインをして印鑑を押せば、奴は帰る。だが、今日は医者に聞いておきたいことがあった。

「『あれ』をどう思う」

数秒の間の後で、医者がこれまた見よがしに溜め息を吐く。

「……どういいう見解からですか？ 能力を見れば、あの子は実に聡い。きちんとした教育を受けさせれば、いずれこの国を代表した科学者にも物理学者にも哲学者にもなれる。性格を言えば、明朗快活調和を重んじ、円滑に物事を進める。容姿も申し分ない、心身ともに『健康』、実に良く出来た少女です」

「良く出来た、ね。客観分析だな。個人の考えでは？」

「医者は悪い意味で清々しい奴だ。逡巡することなく、さらりとこう答えた。」

「形容するなら あの子は 良く出来た螺子捲き人形ですね」

リアリストリアリスト 現実主義者も時に幻想的な喩えをするらしい。

「周りに合わせようと必死です。螺子を捲かれるまで動かない、棄てられないようにただニコニコ笑って座っているような、そんな印象を受けます」

「周りに、合わす？」

「 ええ、あの子は頭の悪い人間とは話さない。自分のIQが突飛していると解っている」

その「頭の悪い人間」を意図するものが、俺だったわけではない。あくまで答えは、医者個人の意見だった。

だが、それを聞いて、俺はようやく気付いたのだ。例えばそれが、部屋内の喫煙に対して何の意見も無いこと。昼に起きてみれば、ラップで出されたものでなく、鍋に直で温められた料理が出てくること。俺が不満を言うより先にテーブルの上の本が片付けられる。質問を切り返される。

彼女の立ち居振る舞いは、調和に由来するのではない。

俺が苛立ちを覚えていたのすら、お門違いだったというわけか。自嘲が出た。

「 どうせな。俺に合わせて話してるって知ってたけどよ」

「 ……」

「ここに居ても腐らすだけだろ。あんたが良ければ、あれを連れてつてくれないか」

手元のボールペンを紙の上で躍らせる。印鑑を押して、ぱさりと相手に投げた。が、大して驚かれもせず、クリップで留められた書類を正確に受け取られてしまう。見かけによらず反射神経もいらいしい。

「確かに、貴方は細胞が『侵食』されて腐っていると思えますが。

貴方が云えば、あの子はすぐにでも支度を始めますよ。自分の立場をわきまえているでしょうから」

医者は一旦その場にしゃがみ、書類をきつちりとファイルに仕舞う。

「茶番を終わらせたいのなら、貴方からあの子に伝えればいい」

細目が嫌味つたらしく俺を睨み付けていた。何処か勝ち誇った笑みになると、奴は付け足した。

「人に罵詈雑言を言うのは、慣れてるんじゃないですか？」

「琉。女の子だったよ。名前、決めたんだ」

はっ、ハラ出てから決めようなんざ、お前らも時代遅れの事やってんな。

そんなんだからノンビリ夫婦って呼ばれんだよ。

「いい名前だろう？ きつちりかつちり、生きてくれそうな気がする」

どんな理由からだよ。カ行が二つ続いて、言い難いったらありやしねえ。

「琉。遠くから見護ってくれて、本当に有難う。私たちね、これから行くと思うてる」

ご苦労なこつたな。歓迎されない里帰りか。

「赦してくれないかも知れないけれど……私たち、あの子を会わせたいの。私たちのせいで、あの子も憎まれるなんて、厭だから」

門前払いされんのがオチじゃねえの。

でも、ま、行って来いよ。辛酸舐めて世間の風当たって帰って来い。

気が向いたら、こうやってケータイで話聞いてやるよ。

「また、名前呼んでやってね。あの子も喜ぶと思うから」

お前らが丁寧につけた名前だ。呼んでやるよ。

呼びにくい名前でも、適当に省略して、いくらだって呼んでやるよ。

だから

そんな呆気なく、消えんじゃねえよ。

〈事中〉

「……琉」

懐かしい呼び方に、はっと目が覚めた。

同時に、上半身に痺れが起こる。どうやらスチール机に突っ伏して寝てしまっていたらしい。お陰で、血の巡りを圧迫された身体が悲鳴を上げている。感覚が戻るのに時間が要った。

と、身体に毛布が掛けられてあるのに気が付いた。この気配りは、恐らく

「琉平さん。起きたの」

パジャマ姿の居候が、真正面の席に座っていた。

俺がこんな風にいきなり目を覚まして、動じない。あらかじめ理解していたかのように、マグカップを差し出してくる。俺の好みをどこで把握したのか、出てくる茶葉は温かい烏龍茶だった。

辺りは薄暗い。リビングのデジタル時計は、最初の数字が零で始まっている。俺を気遣って起こさなかったのか、それとも俺が起きなかったのか。

「眠れなくて、ちょっと起きちゃったんだ。何か飲もうとして台所に行ったら、琉平さんがもそもぞ動いてた」

相変わらず、俺が訊く前に淡々と話し出す。例えば、それが寝ている俺の目の前で、ずっと起きていたことを云わなかったとしたら、呼びかけて、反応した後にはマグカップを用意していたら。

「ごめんなさい、観察しちゃってた。琉平さんの寝顔、ちょっと可愛かったから」

何をするにでも彼女の行動は、気配りと行動の裏付けが行き届き過ぎていた。そこまで合わそうとしているのか。良く出来た螺子巻き人形でいたいのか。俺がどんな理由でお前をここに連れられたか、理解って居ないだろうによ

「……お前、もういいだろ」

烏龍茶を一口飲み終えてから、俺は告げた。

「うん、すぐ寝るね。お休みなさい、琉平さん」

「そうじゃねえ。荷物を纏めろって云ってんだよ」

飲み物を口に含ませていなければ、今の俺の言葉は、擦れていた
だろう。

彼女の唇が、僅かに開く。何かを言いかけて、真一文字に引き結
んだ。

茶番は終わりだ。幕は引かれる。ピリオドは、打つためだけにあ
る。

「PTSDなんて、嘘だろ、お前」

そうして俺が吐き出した科白は、出任せでも何でもなかった。

確証があった。云ってしまえば、俺と彼女の奇妙な同居をお開き
にしてしまうものであると。

「よくまあ自己申告して今まで改竄してこられたな。親の顔が浮か
ばないとか記憶がないとか言いまくって、良心が痛まなかったか？」
医者だつてとつくに気付いていたのだろう。本当の『病人』が、
果たしてどちらであるのかを。

「あのハカセ野郎がお前を引き取りたいんだとよ。お前の能力を買
いかぶってるらしい。良かったな、ロリコン奇天烈先生が傍に居て
？俺もお前を売り飛ばせば、扶養代より数倍の金が入って遊べん
だよ」

出来るだけ皮肉を込めた。医者に指摘されたのも癪だが、俺は昔
から罵詈雑言を言うのは慣れてる。どんな言葉を操って、どんな
風にぶつければ人に最もダメージを与えられるかもそれなりに知っ
ている。そうやって避けてきた。全部払ってきた。効かずに莫迦み
たいに笑っていたのは、あの二人だけだ。

「……心は痛まなかったわ。だって、私は琉平さんと一緒に居たか
つたから」

そこで初めて、彼女が口を開いた。俯きもせず、目も伏せようと
もせず、疚しいことなど何もないと瞳で示して、ただ俺の話が終わ

るのを待っていた。

「『琉』」

俺をそう呼べば、狼狽るのを知っていたからだ。

たった一言別の呼称で聴いただけなのに、俺はすべての動作を止めていた。

サブリミナル

刷込の反応のようだ。忘れられるはずがない。俺をそうやって、

呼んだ人物は、もう

びくりと震え、目を見開いてしまっていた様子を、彼女は一部始終見届けてから、綴った。

「こつやってあなたは、父と母に呼ばれていた。両親が電話口でよく話していたわ。あなたの人となりもよく聞いた。口は悪いけど、性格もちよつと問題あるけど、信頼できるって」

聞いた事のない声色で、けれども平坦な調子で。

俺が彼女に問い詰めていたはずだ。それなのに、何故俺は何も言えない？

彼女が椅子の上に膝立ちになり、テーブル越しに手を伸ばす。冷たい指先が、頬に触れた。

「あなたはわたしの父と母を愛していたんでしょう？ だから、葬式に出向いて、どちらにも似ている忘れ形見を引き取って、一緒に住ませたんでしょう？」

微動だに出来ない。

「そうすれば、ふたりの想い出に浸って『余命』を過ごせるから……」

彼女の白魚のような手が、顔の輪郭をなぞっていく。

見通されていたのは、俺だった。

既に彼女は知っていた。俺が何故彼女を連れ出したのかも、彼女を家に呼んでどう過ごしたのかも、俺がどんな想いであるの二人を見ていたのかも、俺が有餘ない身体であることも、すべて。

「琉平さんも、いなくなるのね」

彼女の親指が、俺の唇に当たる。震えていた。俺ではなく、彼女

の身体が。

いなくなる。そうだ、俺の身体は次第に使い物にならなくなる。撥条仕掛ぜんまいじかけの人形のように、螺子も捲かれずに、潤滑油も注されずに、関節が錆び、発条ばねが伸び切り、色彩いろを失い、廃棄物ゴミになる。

唐突に、いつかの出来事が解離フラッシュバックする。事後報告の電話。献花だけで『残り滓』も見当たらない式。遺影として飾られていた学生時代の写真、居ないことに現実味が湧かない自分。

急に体中の熱が冷えた。

「……はっ」

気付けば、俺はそんな自嘲めいた単語を投げつけていた。彼女の手をぱしりと叩きはた、憎悪の対象とでも仇視でも見るような目で睨め付けた。自分の髪の毛に手を入れ、ぐしゃりと掴む。堰を切ったかの如く、相手にあらゆる感情を垂れ流していた。

「そうだよ、お前の両親は、俺にそういう変態な目で見られてたんだよ。お前はそいつらの後釜で、俺はお前を見る度にそいつらを思い出していた。だってそうだろう？ 大事な奴らが急に消えた。損傷が激しいとか言っつて、棺桶には何も入ってなかった。俺は末期でもうすぐ死ぬ、お前を預かってればいつかふらつてやって来るんじゃないかね。えかって、お前見てればあいつらが居るような気がして、今度こそ護れるって」

あの式の最中、黒と白の幕下で、ひとり、佇んでいたのは。

いつだって 遠く離れた土地から、電話線に乗って聴いた幼い声は。

「それでもいい。……わたしはあなたが欲しかったの」

彼女がテーブルの上に乗る、目線を合わせる。いつもの揺るぎ無い目が、ほんの少し愁いを帯びる。虹彩が僅かに滲み、揺れている。叩かれて赤みを帯びているだろう手で、再度俺の頬を撫でた。薄暗い明りに、彼女だけが幕を張りぼんやりと浮かび上がる。彼女の唇がわななき、小さな舌を覗かせている。

父親似の眼だった。母親似の口元だった。俺が一番大切にしていたか

った ふたりの、残した造詣だった。

「あなたと、一緒に居たかったの。」

俺は、この目の前の体軀を、どうすればいい。

俺を縋って、一緒に居たかったと乞うてきた少女に、どう応えればいい。

あの二人が大切に育ててきた忘れ形見に、俺はなにをすればいいのか。

「……『琉』」

彼女は、俺の迷いを消し去るために、もう一度その名で呼んだ。

招き入れる囁きのようでも、詩を思いつくまま口遊んだようでも、愛しい者の名を呟くようでもあった。

彼女の黒髪に指を入れる。なめらかに透き通り、さらさらと指の間から零れていく。

そうして、俺は 彼女を腕の中へ引き寄せていた。

「……リカ。お前が莫迦じゃないなら、教えてやるよ」

どれくらいそうしていただろう。お互いが相手のぬくもりを確かめていた時に、俺は彼女の名を呼んだ。本来の名前を省略して、電話口で呼びかけていた二文字の愛称だった。

「どうして俺らが此処に居るか知ってるか？ 意味なんて無い、俺らは放り出されたから此処で『生かされてる』だけなんだよ」

テーブルの上に膝立ちしている彼女を抱き留める。腕の中で彼女は大人しくなっていた。

「悲しむな。尊ぶな。人間は一人で朽ちる。どう足掻いたって孤独に死ぬ」

掻き抱く力を更に込めた。表情を悟られまいと、低く、明確に云った。

「だから、一人になることを恐れるな」

こんな考えを植え付けてしまう人間を、あいつらはどう思うだろう

うか。

俺の言葉は諧謔に満ちたものに他ならない。捻くれて世を悲嘆することしか出来ない奴が、勝手にほざいている退廃論、厭世論に過ぎない。

だからこそ。そうでなければ、俺は俺らしく伝えられない。

「あなたが居なくなっても、悲しむなと云いたいのか？」

彼女がほっそりした腕を、俺の背中に回した。軽く押し当てられるような、小さな圧迫が肌に伝わる。

「それなら、わたし、憶えていく。あなたの云ったこと、忘れてたりしない。」

憶えてくれる。悲しまないでくれる。生かされる意味も、朽ちる意味も、無に等しいと思ってくれる。

聡い彼女が、いつか俺の言葉を否定する日が来るといい。

彼女が螺子捲き人形なら、俺が螺子を捲いて、歩かせればいい。

自由に歩けるように。俺に固執なんかせず。ただの人間の操作

回路にならないように。

真実こたえは 混沌カオスの中にこそあるのだから。

『インタフェイスはそこで螺子捲く』 了

〈事中〉（後書き）

《事後・電話》

……

『貴方は思い違いをしていましたね。私は“あの子は頭の悪い人間とは話さない”と云ったんですよ。貴方は一見自信家だが、その実自分の能力を卑下している。厭世的な考えは　もう長くないと悟ったからですか？』

仰りたいことはよく解るよ、ハカセ。

『成程、その言い方だと貴方はどこか吹っ切れたらしい。気になりますね。貴方たち両者間の仲介回路が、どう変化したのか』

さあな。俺は真実も混沌も要らねえしよ。

つと、あれが呼んでる。まあ、とりあえず葬式には来てくれよ。たぶんあと半年後だ。その後はあれを優秀なところにも入れてくれ。本人も細胞学研究したいってやる気満々だ。

『……螺子捲いた人形の行く末を、貴方は見届けないつもりですね
見届けるのは他の誰かだろ。俺はやらねえ。

憶えてくれるだけで、いいんだよ。

“さあ、螺子捲いた人形はどこへ行くかな。”

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0127c/>

インタフェイスはそこで螺子巻く

2008年11月7日06時32分発行